

「風葉和歌集」の構造

——恋一部について——

米田明美

序

文永八年（一二七一）の冬、後嵯峨院皇后である大宮院（藤原姞子）の命により撰せられた「風葉和歌集」（以下「風葉集」と略す）は、当時存在したと思われる二百に及ぶ物語の中から、凡そ千五百余首にもぼる物語歌を抜き出し配した物語歌撰集である。部立や詞書・歌材の配列等は勅撰集の型を継承し、二十卷（但し、現存本はすべて末尾二卷が散逸している）もの内容をも有している。

これまで、部立配列・四季・神祇・釈教・離別・鬪旅・哀傷・賀の各部について、配列・構成等考察を加えてきたが、そ

の結果、外形上の特徴として部立配列の近似や、春下部（巻二）巻頭歌の類似、そして神祇・釈教部巻頭に位置する神詠・仏詠の小歌群の構造（但し「統古今集」は神詠のみ）などから、「風葉集」の直前に編まれた「統古今集」との関連が見受けられた。しかも巻二巻頭歌や賀部の構成より、大宮院の実家である西園寺藤原一族賛美、加えて後嵯峨院御繁栄の意を込めて歌が配されていると考えられる。^{注二}

また、「風葉集」の配列に関し、入集されている物語歌を現存物語のみ物語に返した場合の問題点については、まず鬪旅部に旅中詠じたのではない歌が存すること、同様に哀傷部に臨終の場なく、厳密にみると哀傷の範疇に入らない歌が存すること、神祇部に神祇の場なく詠まれた歌が存することが挙げられてい

る。しかも物語場面の順序やストーリーは無視され、「風葉集」独自の配列に従い並べられている。これらのことは、各物語の場面の展開よりも「風葉集」の配列つまり歌語の展開や時間配列などを優先させて歌を選び、並べていることを示唆していると言えよう。この中で逆に、物語場面は各部の配列と大凡一致していると思われるのに「題しらず」と詞書が附されている物語歌が存することが、問題として浮かび上がってきた。今までの考究では、これらに共通する内容として独詠歌が多く、かつ詠者の苦悩に共感し得る歌が多いと思われる。この問題は残りの部の構造を明らかにした後結論を出したい。

以上の点を考慮に入れつつ、今回恋一部七十九首に関し、配列と物語に返した場合についてを中心にその構造を検討して行きたい。

—

大凡恋部については、二十巻もの内容を持つ勅撰集において、恋一部から恋五部まで（但し、「後撰集」は六巻、「後拾遺集」は四巻である）五巻に分かれた歌が並べられている。しかもその大筋は、相手を思い初めるといふ恋の始まりから、思いが募

り文を遣わし、逢うことができ恋が成就したものの、相手の心変わりや周囲の障害などで破局へと導かれるという、恋愛の進行状況に伴う時間的推移をその柱としている。「風葉集」においても、その型を忠実に受け継いでいるが、藤河家利昭氏の御指摘（注三）通り恋一部から恋四部までで、恋五部は四季の恋歌を収めている。四季の草花・自然・行事等に寄せる恋の歌は、勅撰集の恋の各部・各所に点在しており、「風葉集」の場合それを一つの巻に集めたわけである。それだけ恋愛の進行を示す時間的経緯を表わす配列が明確に鑑賞でき、また別に四季の移ろいに寄せた恋絵巻が味わえるのである。「風葉集」独自の恋部の構成といつて良いであろう。

「風葉集」の恋部の構造については、前述の藤河家氏の詳細な御論文が存するので、参考にさせていただきながら、今回恋一部七十九首についてその内容の展開・配列を示す一覧表を掲げてみたい。

| 歌番号 | 物語名 | 詞書の要約 | 恋の進行状況を示す語句 | 歌語の展開 |
|-----|----------|------------------------|----------------------------|--------|
| 760 | 源氏物語 | 女に初めて遣はし侍りける | 思ふとも君は知らじな | 知らじな |
| 761 | とこなか | 〃 | いかで知らせむ思ふ心を | 知らせむ |
| 762 | 夢語り | 題知らず | いかにして…思ふ心を漏らし初めまし | かかる涙 |
| 763 | 花のしるべ | 〃 | 物思ふといふは何とも知らざりき袖に涙のかかるなりけり | 涙のかかる |
| 764 | 人たがへ | 中宮いまだ内のおとどのもとおはしましけるころ | いかばかり涙の数の落つるをか物思ふとは人のいひけん | 知らせて |
| 765 | をぐら山たづぬる | 女院の大納言に… | 心のうちを知らせてしがな | 知らせて |
| 766 | 里のしるべ | あひ思ひ侍らざりける男のもとに… | 知るらめや恋しとだにも言へばえに | 知るらめや |
| 767 | 緒絶えの沼 | 女を引きとどめて… | 忍ぶべき心地やはする数ならぬ身に包めども余る思ひを | 思ひ |
| 768 | みかきがはら | 心に思ふことを忍び願す… | 憂きはためしの有る身ならねば | 憂きはためし |
| 769 | かほほり | 御返し | 憂きはためしなからむ下の思ひにも…焦がれめ | 焦がれる |
| 770 | ぬりごめ | つれなく侍りける女に… | 思ひに燃ゆる我が身なるらん | 燃ゆ |
| 771 | ぬりごめ | 女の…見えざりければよめる | いとどしく暗き闇にもまどはるるかな | まどはる |

| 784 | 783 | 782 | 781 | 780 | 779 | 778 | 777 | 776 | 775 | 774 | 773 | 772 |
|--|-----|--------------------------------|-----------------|---------------------|-------------------|----------------|---------------------|-------------------|----------------|----------------|--------------------|---------------|
| うっぱ物語 | | 道心にすすむる | 風につれなき | 海人の藻垣火 | あづま | みかきがはら | | みなせ川 | うっぱ物語 | 玉藻に遊ぶ 権大納言 | 岩垣沼 | かやが下折れ |
| その傍らに書き返して返し待りける | | 衣の袖に涙のかかりて…それに書きつけて 女に遣はしける | 忍びて女に遣はしける | 「紅の色には出でし」といふ歌の傍らに… | 身より余れる人をほのかに見てよめる | かく独りこたせ給ふを聞きて… | 人知れず御心に物のかなはざりけるころ… | 中務卿のみこの娘東宮に参るべしと… | 女のもとに遣はしける | 〃 | 題知らず | しのびたる女に遣はしける |
| 袖裁ちて…涙のかかる色も知るべき | | 衣の袖の色を見よただの涙はかかるものかは | 漏らさじとつつむ袖より余る涙を | 色変るまで…漏らしかねたる袖の涙を | 涙も今ぞ色に出でぬる | 芹摘みわびし人の心も | 摘む芹の…御垣が原の下の浮草 | 数ならぬ波の下草浮き沈み | みごもりて思ひしよりも池水の | 岩垣や沼のみごもり漏らしわび | 岩垣沼の水…色には出でず漏る方もなし | 思ひ余り人目忘れて迷へとや |
| <p>色 → 漏る ← 色 → 御垣が原 ← 芹摘み ← 数ならぬ → 池水に → みごもり → 岩垣沼 → 迷へ</p> <p>池水に 関する</p> | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|--|-----------------------------|-----------------------------|--------------|----------------|---------------------|--------------------|---------------|-----------------|-----------------------|----------------------|---------------|---------------|
| 797 | 798 | 799 | 794 | 793 | 792 | 791 | 790 | 789 | 788 | 787 | 786 | 785 |
| しづくににける | 紅梅 | ふくろかけ | うつほ物語 | うつほ物語 | うつほ物語 | 岩屋 | 岩うつ波 | よそひの思ひ | 狭衣物語 | みかさがはら | よつあし | 逢ふにかかる |
| 題知らず | 帝せちにのたまはせる御返事に… | 忍びたる男の返事に | 〃 | 〃 | 藤壺の女御いまだ参り侍らざりけるころ… | …女のはるかなるほどへまかりけるに… | …女内に参るべしと聞きて… | 中宮宇治におはしましけるころ… | 女をうち解けぬさまにて明かさせ給ひける後… | …うち解けたてまつらぬさまに侍りければ… | 男の…返り事に | 梅壺の女御に思ふ心のほど… |
| つつめども…せきわびぬ涙の川や浮き名流さむ | せきかぬる涙の色はまさるとも逢ふといふ名をいかが流さむ | せきかぬる涙の川と聞くからに我が身さへこそ浮きて流るれ | 涙川浮きて流るる今さへや | 涙川浮きても物を思ひけるかな | 涙さへなき世なりせば | 涙かとかかる袂を見ても知らなん | 涙ばかりをかくる袖かな | 片敷きの袖は我のみ朽ち果てて | 片敷きに重ねぬ衣うち返し | 重ねてのなかの袖も恨みし | 扉衣重ねば返る色もこそあれ | 忍び余り色に出でぬる袂かな |
| <p>The diagram illustrates the relationships between the words used in the text. It shows '涙川' (Tear River) and '涙' (Tear) with arrows pointing to '浮きて流るる' (floating and flowing) and '浮き名流さむ' (floating name flows). '片敷き' (Single-layered) is linked to '重ねる' (Stacking) and '袖' (Sleeve). '重ねる' is also linked to '重ねる' (stacking). '涙' is linked to '涙かとかかる袂' (tear-drenched sleeve).</p> | | | | | | | | | | | | |

| 798 | 799 | 800 | 801 | 802 | 803 | 804 | 805 | 806 | 807 | 808 | 809 | 810 |
|----------------------------|--------------------------|-------------------------|-----------------------|--------------|--------------------------------|--------------------------------|--|----------------------------------|----------------------------|---|----------------------------|----------------------------|
| 源氏物語 | おやこの中 | 初音 | ちちにくたくる | 住吉物語 | 返し | 女のもとに遣はし侍りける | 返し 育院に雪にて富士の山作られて侍りけるを ： | 狭衣物語 おほすこといささかもらさせ給ひつる女に ： | うつほ物語 ：煙などして女のもとに遣はしけるに | みかきがはら 中宮一品宮と申しける時 ： 一条院の女一のみこに忍びつ | 玉藻に遊ぶ 樅大納言 | |
| 女のつれなく侍りけるに ： | 題知らず | 忍びたる女に ： | 返し ： | 題知らず | 返し ： 育院に雪にて富士の山作られて侍りけるを | 返し ： 育院に雪にて富士の山作られて侍りけるを | 返し ： 育院に雪にて富士の山作られて侍りけるを 燃えわたる我が身ぞ富士の山よ ：煙立ちつつ | 我ばかり ：室の八島の煙にも問へ | ひとりのみ思心の苦しきに煙もしく ： | むなしき空も行く方をたがためくゆる下の煙ぞ | 下燃えに身をのみ焦がす我が恋の煙や今日は空に満ちぬる | 下燃えに身をのみ焦がす我が恋の煙や今日は空に満ちぬる |
| せくからに ：山川の流れての名をつつみ果てずは | 海人の塩屋にあらねどもただ我が焼くと燃ゆる恋かな | たく蕨の煙 ：絶えぬ思ひに身を焦がすかな | 蕨垣の煙なほ立つな下にはほめく思ひなりとも | 蕨垣焼く浦吹く風に立つ煙 | 煙絶えせぬ富士の嶺の下の思ひや | 富士の嶺の煙と聞けば頼まれず | 燃えわたる我が身ぞ富士の山よ ：煙立ちつつ | 我ばかり ：室の八島の煙にも問へ | ひとりのみ思心の苦しきに煙もしく ： | むなしき空も行く方をたがためくゆる下の煙ぞ | 下燃えに身をのみ焦がす我が恋の煙や今日は空に満ちぬる | 下燃えに身をのみ焦がす我が恋の煙や今日は空に満ちぬる |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|--------|---------------------------|----------|-------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 817 | 岩屋 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 818 | 隠れ蓑 | つれなく侍りける女のもとに | つらしとも恨みじ | 石見潟 | 道心すすむる | 返事もせざりける女に… | 返事もせざりける女に… | あじろ | | | | | | | | | | | | |
| 819 | 嵯峨野 | かろうじて一度返事したる女… | 佐野の舟橋 | 難波潟 | …返事を一度も見侍らで | 返事もせざりける女に… | 返事もせざりける女に… | | | | | | | | | | | | | |
| 820 | 隠れ蓑 | よそながら明かして侍りける女のもとに… | 逢坂の関 | 逢坂山 | よそながら明かして侍りける女のもとに… | いと忍びたる女あたりと… | いと忍びたる女あたりと… | | | | | | | | | | | | | |
| 821 | よその思ひ | 逢坂山ぞはるかなる人の心の関を隔てて | 逢坂山 | 逢坂山 | いと忍びたる女あたりと… | いと忍びたる女あたりと… | いと忍びたる女あたりと… | | | | | | | | | | | | | |
| 822 | 女すすみ | いかなる道の初めとて端山繁山 | いかなる道 | いかなる道 | 登花殿の女御…忍びて尋ねまうづとてよみ侍りける | 登花殿の女御…忍びて尋ねまうづとてよみ侍りける | 登花殿の女御…忍びて尋ねまうづとてよみ侍りける | | | | | | | | | | | | | |
| 823 | とりかへばや | いかなる道にまどふうむ…遠近の山 | いかなる道 | いかなる道 | 男の…いへりける返事に | 男の…いへりける返事に | 男の…いへりける返事に | | | | | | | | | | | | | |
| 824 | とこなか | ほのかにも木の間の月の…物や思はん | ほのかにも | ほのかにも | これを聞きたてまつりて | これを聞きたてまつりて | これを聞きたてまつりて | | | | | | | | | | | | | |
| 825 | 緒絶えの沼 | ほのかにも木の間の月の…見つとばかりを人に知らせむ | ほのかにも | ほのかにも | 関白北の方をほのかに御覧して… | 関白北の方をほのかに御覧して… | 関白北の方をほのかに御覧して… | | | | | | | | | | | | | |
| 826 | みかきがはら | ほのかにも | ほのかにも | ほのかにも | …右大将申し侍りけるに | …右大将申し侍りけるに | …右大将申し侍りけるに | | | | | | | | | | | | | |
| | | ← 関 → | ← 山 → | ← 月 → | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | ← うらみ → | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|-----------------------------|--------------|-----------------|----------------|-----------------|-------------|----------------|-----------------|------------------------|--------------------------|------------------------|----------------------|
| 836 | 835 | 834 | 833 | 832 | 831 | 830 | 829 | 828 | 827 | 826 | 825 | 824 |
| 狭衣物語 | あたりさらぬ | よその思ひ | あさくら山 | 松浦宮物語 | 松浦宮物語 | 水あさみ | | あたりさらぬ | みかきがはら | よもぎが原 | 女のすくせしらず | 有明の別れ |
| 同じさまにて明かさせ給へる女のもとに… | 忍びたる女をうち解けぬさまにて明かしてよめる | 題知らず | …女にほどなくひき別るとて | 神奈備のみこに聞こえ侍りける | 参議氏忠琴の音を尋ねまうで来て | 〃 | ほのかに見て侍りける女の… | つれなかりける女のもとにて… | 中宮のいまだ参らせ給はざりけるころ… | …女にたまはせける | …宜座殿の女御いまだ参り侍らざりけるころ | あるまじきことを思ひけるころよみ侍りける |
| 面影は身をも離れずうち解けて寝ぬ夜の夢は見るとなけれど | 見しや夢喚くやうつつかかなりし夜はの名残に我まどふらん | やがて寝ぬ夜の夢も結ばず | 物思ふとなにいにしへを喚きけん | 恋死なば恋も死ぬべき月日へて | 玉の緒の絶ゆるほどなき世の中を | 何に懇くべき命ならまし | 命さへ思ひにやがて絶えぬべし | 命さへ人よりもろき名をや流さむ | たが名惜しき命だに逢ふにし換へば露のためしを | 命に換ふるものならば我が身を捨てて逢ひもみてまし | 惜しからぬ身の長らへてつらきに耐へぬ同じ命を | 身をくだく恋の行方を尋ねれば |
| <p style="text-align: center;">やがて寝る</p> <p style="text-align: center;">身をくだく</p> | | | | | | | | | | | | |
| 夢 | | | | | | | | | | | 命 | |
| | | | | | | | | | | | 恋死 | |
| | | | | | | | | | | | 玉の緒 | |

| | | | |
|-----|-------------------------------|-------------------------------|-----|
| 338 | 337 | ちぢに、だ、ころ | |
| 返し | 忍びたる所にて情なからぬさまにもてなし て出つとめて | 世の常の別れと人や思ふらむこはたぐひなき袖の涙 を | 見し夜 |
| | | たぐひなき袖の涙を懸けてだに見し夜の夢と人に語 るな | |

・歌番号は、中野狂次・藤井隆著「増訂校本 風葉和歌集」に依る。また以下の引用もこれに依る。

・○の附してある歌番号は、散逸物語及び、現存物語の散逸部分に属していた歌であることを示す。

・一の有する歌は、贈答歌或いは、連続して物語から抜き出されたことを示す。

二

恋一部の巻頭歌は、「源氏物語」において柏木が玉鬘に贈った歌である。

女にはしめてつかはし侍ける
御思ふとも君はしらしなわかへり岩もる水の色しみえねは
この柏木の玉鬘への思慕は、二人が異母兄妹であることが知れるによつて収結するものであり、結果的には実らなかったと言

えよう。詞書の「女にはしめてつかはし侍ける」は、胸に秘めた思いを始めて相手に告白するもので、恋の始まりに相当する。恋部巻頭にこの「恋の始まり」の歌を置くのは「古今集」以来勅撰集の常套的手法であり、特に「風葉集」に先立つ「続後撰集」「続古今集」恋一部巻頭歌は、「題しらず」と詞書が附されてゐるものの、

「続後撰集」題しらず
よみ人しらず
恋おほつかななにの色をしらねどもただふかくのみ思ひそめけん

「続古今集」題しらず

業平朝臣

唄きみによりおもひならひぬよのなかの人はこれをやこひと
いふらむ (注四)

と、非常に似通った意の歌で飾られている。次の70歌へと展開して行く語句は、「思ふとも君はしらじな」(70)から、「いかてしらせんおもふ心を」(71)・「いかにして・・・思ふこゝろをもらし初まし」(72)と、一人悶悶と思ひ悩む男君達の姿が浮かび上がる。そして更に、「心のうちをしらせてしがな」(73)と相手に望み、また「恋しとだにいへばへに」(74)と苦しみ、この上ないつらさを「憂きはためし」(75・76)と詠じ、更に思ひの火が「焦がれめ」(77)・「燃ゆ」(78)状況を慰める。そして「恋ふれはいとどしく暗き闇にもまどはるるかな」(79)・「思ひあまり人めわすれてまよへとや」(80)と、恋故道に迷ってしまった自らを嘆く歌へと続いていく。巻頭歌から79歌までの十三首は、二首ずつ歌語による共通性をもたせながら、「思ふ」「思ひ」の語が詠み込まれている。

次に70歌から79歌までの七首は、「岩垣沼」(73・74)・「池水」(75)・「波の下草」(76)・「下の浮草」(77)と、「水」に関連する語による統一がみられる。この前半の歌では、「もるかたもなし」(73)・「もらしわび」(74)と更に恋心が募り思いが外に漏れ出る—という内容とかがわつており、後半の707980歌では、「数ならぬ」と浮草のようにもの数でない我が身を嘆いている。特に7079は、「御垣が原」の連想から当時口承説話として有名な「芹摘む人」に関する「つむせりのね」(78)「せりつみわびし」(79)へと導かれ、身分違いの手のとどかぬ高貴な女性に思いを寄せ、苦悩する男君の姿が描かれている。

790歌から798歌までの十九首は、その内十七首に何らかの形で「涙」が詠み込まれている。また798歌から799歌までは、「涙」の縁で「袖」「衣」の語が並べられている。相手を思う余り涙が血の色となって流れ、人目につく様になり、「涙も今ぞ色に出ぬる」(790)「色かはる迄・・・袖のなみだを」(791)「袖の色をみよ」(792)「涙のかかる色もしるべき」(793)「色に出ぬる袂かな」(794)と相手に訴えようとしている。更にその溢れ出た涙が川となって流れ出、その流れにのつて「うきてなかる」(794・795)「あふといふ名」(796)「うき名」(797)「なかれての名」(798)が広まってしまおう—という配列がされていると言えよう。

そして799歌から804歌までの十六首は、うち十三首が「煙」に関する歌語でまとまり、802803804歌は煙が立ち昇り月まで達するという関連からか、「月」で共通している。799歌には、歌中に

「海人の塩屋」わがやくともゆる恋」と、相手を思う故自らを焼く程燃える恋の情熱を訴え、「たく藻の煙」(80)「もしほの煙」(81)「もしほ焼く」(82)が共通して見出される。83歌は、「煙」の関連から「煙絶せぬ富士の嶺」となり、次歌8485歌にも「富士山」「煙」が並べられている。そして86「狭衣物語」歌では、その「煙」が煙の名所として名高い「室の八嶋の煙」となり、88歌からは「むなしき空ゆくかたを」(88)「空に満ちぬる」(89)「雲の上の立ちのほりぬる」(90)「かひなき空」(91)と胸にくすぶっていた下燃えの煙が空に満ち、更に雲の上まで昇るよう配列に工夫がこれされている。次の82歌から三首は、その雲の上まで昇った煙が更に立ち昇り、月まで達するという連想であろうか、「月」の語が共通している。どの歌も「ほの見し」(82)「ほのかにも」(8384)と、相手を月にたとえほのかに垣間見た女性に思いを寄せる内容である。

85歌からは一転して山に関する歌語で三首まとなり、次に名所に関する歌四首へと続いている。85歌は「遠近の山」、86歌は「端山繁山」で両歌とも「いかなる道にまどふらむ」「いかなる道の初とて」と、恋路の入口で迷う嘆きが詠じられている。同様に87歌では「逢坂山」、88歌では「逢坂の関」が並べられている。89歌は、88歌の関連からか三首名所を詠み込んだ歌が

配されており、89歌の「佐野の舟橋」、90歌は「難波渦」、91は「石見渦」で、どの歌にも詞書に返事ももらえない相手に文を遣わす内容が記されており、思う人の冷たい態度を嘆く歌である。92歌は、やはり詞書に「つれなく侍ける女に」と相手のつれなさを述べ、名所こそ詠まれないものの、92歌と共通し「うらみ」の語が並べられている。

相手のつれない態度故出家しようかと言う「身をやかえまし」(93)は、94歌では我身を粉々にする「身をくだく」へとエスカレートし、95歌から六首「命」を含む歌にと導かれ、91歌「玉の緒絶ゆ」、92歌「恋死なば」へとつながって行く。「命」をめぐる小歌群は、あなたの薄情さに苦しむぐらない自らの命を捨てたいと言う「すて、ばや・・・つらさにたえぬおなじ命を」(94)や、あなたに逢えるのなら命さえ惜しくないと言う「命にかふる物ならば我身をすて、あひもみてまし」(95)、加えて「命だにあふにしかへは」(96)とその苦悩を訴えている。更に「玉の緒のため程なき」(97)、「恋しなばこひもしぬべき」(98)と、恋のため命さえ落とすことも惜しくないという表現に展開して行く。

そして93歌では、散逸物語「あさくら山」の「物思ふと何いにしへをなげきけんかくいひしらぬをりも有けり」と、今の辛

さを思うにつけ昔物思いしなかつた頃を懐しみ、「夢」を含む歌五首を並べて恋一部は閉じられている。この五首のうち四歌の「題しらず」を除き、どの詞書にも忍び思う相手にやつと逢えたものの、相手のつれない態度にうち解けぬまま夜を明かした内容が記されており、この逢瀬を夢か現か・・・と愁うる歌「みしや夢なげくやうつつ」(88)、「ねぬよの夢はみるとなけれど」(89)がある。巻末の8788歌は、女性の方が積極的に男を招いた歌と考えられるが、最後88歌の「みしよの夢を人にかたるな」は、心通わなかつたことを人に話さないで・・・と、思いが通じなかつた女の歌で締めくくっている。

以上のように、この恋一部は数首ずつの歌語の連続や、共通する歌語による小歌群で関連付けながら、恋の進行状況に伴う詠者の気持を、歌中の語句の展開に準じ拾い集め、並べたものと言えよう。人を思う恋心が付き初めた歌を巻頭に、相手に文を贈りつつもその思い故に流した涙が血の色となり外へ表われ、その涙は川となる。一方ではその思いの火は燦り煙となつて空に昇り、月に達する。そして更に恋路の迷いから命さえも捨てても違いたいと願う。巻末においては、会うには会つたものの相手のつれない態度にうち解けぬまま夜を明かしてしまうという大筋と言えよう。この恋一部については、恋の初期の段階と

言うより、思い初めてからの片思い——つまり思う相手に近付こうとするも、気持が伝わらなくて苦惱する——耐え忍ぶ恋の歌を集めていると言えよう。

三

以上、恋一部の配列について論じてきたが、現存物語に関し各々物語に返して、配列上の位置と詠じられた物語場面とのかわりについて論じてみたい。

まず巻頭の「源氏物語」柏木の歌であるが、「女にはしめてつかはし侍ける」と詞書が付され、この「女」は前述した通り玉鬘をさす。ちなみに、「物語二百番歌合」の前の九番に採られている同歌の詞書は、「（注六）頭中将ときこえし時、たまかづらの内侍のかみに」と、相手の名を明記している。「物語二百番歌合」の詞書と比較してみると、「風葉集」の同歌の詞書だけでは、単なる「女」と記してある故、相手の女性について分からないばかりか、「源氏物語」のどの巻のどの場面かさえも知らないといふ。詠者名記されていても、詞書中に相手の名が示されていないと、この詞書だけではすぐには思い出せないであろう。このことは逆に、「風葉集」撰者がこの歌の詞書を「女」とし

名を示さなかつたのは、或いは玉鬘という名を明らかにするこ

とにより、後にこの二人が異母兄妹と判明し、この恋は発展しなかつたという物語の頌末が「風葉集」の読み手に察知されるのを避けるためとは考えられないだろうか。柏木の玉鬘への恋心を表す歌は、「源氏物語」においても主たる構想につながるものでもなく、一つの挿入譚である。恋部の巻頭を飾る歌として、物語に返した場面から鑑みした場合、いささか迫力に欠ける感がある。しかも「風葉集」の他部に採られている「源氏物語」歌の詞書に、玉鬘の名を明記している歌は五首も存し

（全注）
ており、玉鬘の名は他部の詞書では記されているのである。以上のことから推察するに、初めて女に文を遣わすという場面や、歌内容は恋部全体の巻頭にふさわしいものの、相手の名を示すと読者にその行末まで悟られてしまい、「風葉集」独自の配列鑑賞を薄めてしまうためではないだろうか。配列を味わう、配列優先のための工夫と言えるのではないだろうか。

次にこれと類似の手法が、次の「住吉物語」「狭衣物語」の詞書にも見られる。まず「住吉物語」歌であるが、

女のもとにつかはし侍ける

すみよしの関白

郎世と、もにけふり絶せぬふしのねのしたの思ひやわか身なるらむ

かへし

按察大納言三君

郎ふしのねのけふりとききはたのまれすうはの空にや立のほらん

とある。この歌は、前の799 800 801 802歌に「煙」が含まれていることから、その「煙」に尊かれ「富士の嶺の煙」と展開して行ったものと考えられる。この詞書の「女」は返歌の詠者名記により知られるが、本当は中納言（最終官職名は関白）であつたが、中の君の君に恋した少将（最終官職名は関白）であつたが、中の君の継母の計略により返歌することになった三の君である。無論男君はその返歌を自分の思い人と思ひ込んでいるわけである。だが、この詞書だけでは配列上の位置や歌内容からも、男君が忍びに忍んだ思いをやつと意中の相手に伝えたことになり、正確な記述とは言い難い。勿論、この贈答歌の時点では二人とも継母の策略にのせられたとは知り得ていなかっただけに、詞書に誤りが記されているわけではないが、物語場面からすると十分な詞書の書かれ方と言えるであろう。また、特に主人公である男君の歌がこの三の君との贈答歌のみ、「風葉集」に採られているというのも不審である。

次に続く「狭衣物語」歌は、

斎院に雪にてふしの山つくられて侍けるを御らんして

さころものみかとの御歌

85もえわたるわか身そふしの山よたゝゆきにつもれとも烟た
ちつゝ

おほすことをいさゝかもらせ給つる女に

86われはかり思ひこかれて年ふやとむろのやしまの烟にもと
へ

である。物語に返すと、85歌は巻二、86歌は巻一に収められて
いる。しかも85歌の「女」は、85歌の詞書に述べられている斎
院、つまりこの両歌を詠じた当時は源氏宮その人で、8586両歌
とも相手の女性は同一人物なのである。この両歌とも「物語二
百番歌合」に採られており、85歌の詞書は、「源氏の宮の御か
たにゆき山つくるを御らむじて」、86歌の場合「斎院源氏の宮
ときこえし時」とある。「物語二百番歌合」の詞書の方が、簡
潔であるものの物語場面に則していると言える。85歌は、まだ
堀川関白邸に源氏宮として住まっていた頃、官方の女房達が昨

夜積つた雪で富士山を作り、煙を立てて遊んでいるのを、狭衣
大将が障子を少しあげ垣間見た時の歌である。85歌は、巻一に
おいて狭衣大将が初めて自らの心境を源氏宮に告白した歌であ
る。その物語場面は「風葉集」の配列とは逆であり、85歌の詞
書に相手の女性―つまり源氏宮の名を明記すると、配列と物語

場面の前後が「風葉集」の読み手に知られてしまうからではあ
るまいか。8586歌の配列は、99歌から82歌まで四首に思いの火
に身を焦がすあまり「藻塩の煙」が詠み込まれた歌が並べられ、
その関連から当時煙の絶えなかつた「富士の煙」を含んだ歌が
85歌から三首続いている。そしてこの85歌は、その「煙」の縁
で、富士と同じ煙の名所として名高い「室の八嶋の煙」歌が置
かれていると考えられる。特に85歌の「物語二百番歌合」にお
いての詞書が、「ゆき山つくる」であるのに対し、「風葉集」の
詞書には「ふしの山つくられて」と、配列を意識してか「富士
山」が示されているのは興味深い。おそらく85歌の詞書に、85
歌の詞書に示してある同じ女性「斎院」を単に「女」と表記し、
別人のように装わせたのは、「風葉集」の配列を意識したため
であろう。配列鑑賞を優先させた詞書の書かれ方と言えるので
はないだろうか。

また他に、次の二首の「狭衣物語」歌は、同じ恋一部中四十
八首程隔った位置にあるが、物語に返すと近似の場面である。

女をうちとけぬさまにてあかさせ給ひけるのちこひしうお
ほし出られてよるのころもをかへしわひさせ給ふよなく
もさすかにあやしうおほされければ

さころものみかとの御歌

788 かたしきにかさねのころもうちかへし思へは何をこふる心
そ

おなしさまにてあかさせ給ひつる女のもとにつかはさせ給
ひける さころものみかとの御歌

836 おもかけは身をもはなれすうちとけてぬぬよの夢はみると
なけれと

この両歌の詞書の「女」は、ともに式部御宮の姫君、後の藤原中宮である。物語の進行順序からすると、836歌の方が先である。宰相中将の母君の山近い寺院を訪れ、母君を見舞った狭衣大将は、そこで源氏宮に似た面ざしの宰相の妹君に会い心が乱れる。屋敷に帰ってもその面影が忘れられず、836歌を詠じる。836歌の詞書「おなしさまにて」は、前の836歌の「しのびたる女をうちとけぬさまにて」を受けていると思われる。ところが宰相の母君の逝去の知らせが入り、会えない日々が続き、788歌を宰相を通じて遣わすのである。788歌は、前歌附の「かさねてなかの袖もうらめし」の展開で、「かたしきにかさねのころも」として並べられ、次788歌の「かたしきの袖」へと続いているのであろう。836歌は、834歌からの「夢」の関係でこの位置にあると思われる。ここでも、「狭衣物語」歌でさえその物語のストーリーは解体され、歌語の展開に準じ配されていることが示されよう。この

両歌とも「物語二百番歌合」に収められており、788歌の詞書は「中宮にきこえそめさせ給へりしころ」、836歌の場合「中宮にしのびておはしましそめてあしたに」で、ともに相手の名を記している。

四

以上のように見てみると、この恋一部の詞書において、相手の名を示さず単なる「女」「男」「人」という人称に関する名詞で表現している歌が多いのに驚かされる。「風葉集」恋一部に属する「物語二百番歌合」の各詞書との比較でも明らかであろう。更に恋部全体まで拡大してみても、「風葉集」恋一―五部において、「物語二百番歌合」と重複して採歌される歌は六十首存する。このうち「物語二百番歌合」の詞書は、相手の名・場面を示そうとする方向であるのに対し、「風葉集」の場合同じ六十首中十六首しか相手の名は明記されていない。^{（注八）}他は、「女」「男」「人」「処」等人称に関する名詞での表記である。この点、「風葉集」と「物語二百番歌合」の、「風葉集」恋部について、詞書の附し方の一つの傾向が何えよう。次の表は、「風葉集」全歌の詞書において、相手の名を明らかにせず人称に関

し、名詞表記している歌の数を、各部毎にまとめて示したものである。

| | 人名詞表 | 各部の歌数 | |
|------|------|-------|----|
| (3) | 11 | 59 | 春上 |
| (2) | 13 | 74 | 下 |
| (4) | 14 | 77 | 夏 |
| (0) | 10 | 75 | 秋上 |
| (3) | 13 | 78 | 下 |
| (1) | 19 | 80 | 冬 |
| (0) | 2 | 38 | 神祇 |
| (1) | 5 | 41 | 祝 |
| (4) | 9 | 48 | 祭別 |
| (0) | 5 | 31 | 隠旅 |
| (0) | 10 | 99 | 哀傷 |
| (0) | 0 | 59 | 買 |
| (3) | 35 | 79 | 恋一 |
| (12) | 55 | 98 | 二 |
| (3) | 18 | 40 | 三 |
| (3) | 28 | 74 | 四 |
| (7) | 41 | 104 | 五 |
| (1) | 10 | 98 | 雑一 |
| (0) | 6 | 78 | 二 |
| (1) | 13 | 78 | 三 |

・人称名詞表記は、「人」「女」「男」「しのびたる処」^(注九)に限定した。

・詞書中は人称名詞表記でも、贈答歌の場合返歌に詠者名が記され、名が明らかになる歌がある。その数を()で示した。

・胸書が付されていない歌の場合、特に散逸物語では、詞書の脱落か前歌の詞書がかかっているのか判断つかないものも数首ある故、多少の誤差はあるかもしれないが、二〜三首程度である。

・恋三・四部は、四十〜五十程度の脱落があると考えられる。

この表を一見すると、やはり恋部において歌数の約半数近くの歌の詞書に、相手の名を明記せず名詞で表わしていることが分かる。恋部で急増しているのが注目されよう。無論この中には、贈答歌として採歌されていて、返歌に詠者名が記され相手の名が知れるのも表の通り、幾首か存するが、その数値を引いても恋部での増化は変わらないであろう。そもそも恋部というも

のは、男女の恋愛に関する歌が集められているのであり、四季部等他部と異り、必ず対象となる相手が存在するはずである。それ故その相手の名を明記しなければ、物語場面が正しく「風葉集」の読み手に伝わらないことになる。『風葉集』を読み味わう者は、やはり物語の愛読者であろうし、たとえすべての物語でなくても二人の名を知れば、その物語場面だけでなく、恋愛の行方まで察知してしまうものもあるであろう。名を示すことにより、二人の恋が成就するか失恋の結末を迎えるかが見えてしまい、「風葉集」の配列鑑賞の妨げとなるのではあるまいか。また、物語の進行と配列が逆になっても、名を示さなければその矛盾には気が付き難いという利点もあろう。どちらにしても、詞書に相手の名を記さず、人称に関する名詞の「人」「女」「男」「しのびたる処」という突き放した表記、曖昧な表現にすることによって、恋の各部に溶け込ませ、配列による恋絵巻を楽しもうとする工夫ではないだろうか。

ただ、現存物語歌の詞書で、相手の名を示している歌を名詞表記している歌を比較しても、すべてにおいてその理由が見出せるわけではない。「うつほ物語」歌のように、恋一部で同じ実忠詠の詞書で同一女性(あて宮)を「女」と表記したり(75・807)、「藤壺の女御」と示し(92・93)ているものもある。

「うつほ物語」の主要人物でもない実忠の歌が、四首も集中したため相手の名を書き分けたのかと考えられるが、明確には言い切れない。また、萬の「源氏物語」の夕霧詠の歌についても、落葉宮を「女」として伏せているが、結果的には成就した恋愛であつたためであろうか。二人の恋物語に一時世を憚る時期があつたのは周知の通りであり、これも明確に断定できない。圧倒的に散逸物語が多いこともあり、すべてに理由を見い出すには限界もあろう。だが、この「人」「女」「男」「しのびたる処」という表記が恋部に入つて急増することは、やはり注目に値するであろう。恋歌は、思う相手あつて始めて成り立つ人の感情である。「風葉集」の配列を味わう上で、各歌すべての詞書に相手の名を示すと、各歌の物語場面の行末まで知られてしまい、物語によつてはそのイメージが強すぎて鑑賞の妨げとなつてしまふのではないだろうか。各物語で繰り広げられる恋絵巻は、物語間の影響はありつつも、その物語の数だけ、その登場人物の数だけ、いやそれ以上の恋愛譚が語られ、数多くの恋歌が遣り取りされたであろう。各物語・各場面の恋の感情は、本来ならたとえ恋の初期であつても一括りに出来ないものであり、それぞれ微妙な相異があるはずである。それらを一元に並べるには、やはり何らかの工夫が必要であろう。「風葉集」恋一部の

配列一つまり相手を思い初め、その思いを打ち明けられず苦惱し、文を遣わしつつか思ふ相手に会うも、相手のつれない態度に逢うーという時間的配列を味わうために、配列の鑑賞を優先すべく、詞書に相手の名を隠す「人」「女」「男」「しのびたる処」等名詞表記を多用し、物語場面による拘束を薄めようとしたのではあるまいか。

「風葉集」はその序文に、「これをもととしてさらにえらひそへ、まきをわかちことはをとゝのへてたてまつるへきおほせことになんありける」と、その成立過程を示した記述がある。この中の「ことはをとゝのへて」は、詞書に関する内容と考えられる。樋口芳麻呂氏は「詞書に手を入れて」と解釈しておられる。これは単に詞書の不備を補入したり、削除したりするだけでなく、歌を並べ配列を味わうために、配列鑑賞を優先させる方向に詞書を整えたことをも意味するのではないだろうか。

結 語

以上、恋一部の配列と物語に返した場合の問題点について考究してみた。その結果、恋部は、恋愛の進行状況に伴う詠者の心中を示す語句や、数首ずつ共通する歌語の展開によつて並べ

られていと思われ。巻頭には、相手を思い初めその気持を訴える歌を置き、その思いが高ずるも通じず、巻末ではやっと会えたものの相手のつれない態度に打ち解けぬまま夜を明かす……という配列になつていてと考えられる。その中で、巻頭の「源氏物語」の柏木詠の歌などの様に、相手あつての恋の歌であるのに、詞書に相手の名を示さず単なる「人」「女」「男」「しのびたる処」等とする表記は、名を記すとその物語の頭末まで「風葉集」の愛誦者達に見通されてしまい、配列鑑賞の妨げになつてしまうからではあるまいか。たとえ思いを初めた男君の歌を巻頭歌群にまとめ、各物語その結末は悲恋か成就か、各々異ると思われるのである。また、配列と物語の進行が逆であつても、名を明記しなければその矛盾には気がつき難いであろう。これらがこの恋部に入つて、「人」「女」「男」「しのびたる処」の人称に関する名詞表現が急増している一因ではあるまいか。「風葉集」独自の配列を味わい、鑑賞させるための工夫と言えらう。そしてこれらは、配列を味わうべく詞書に手を加えたことを推定させ、「風葉集」序文の「これをもとしてさらにえらひそへ、まきをわかちことはをとのへて」の「ことはをとのへて」に通じるものではないだろうか。逆に言えば、「ことはをとのへて」とは、配列を柔しむため

の配列鑑賞を優先させる方向で、詞書を整えたことをも示唆しているのではないだろうか。

〔注一〕拙稿（旧姓 原田）「風葉和歌集構造試論―部立考」、『中古文学』第二十八号。拙稿（旧姓 原田）「風葉和歌集」の構造―離別部の構造、『論叢』昭和五十六年一月。拙稿「風葉和歌集」の構造―露旅部について、『平安文学研究』第七十三輯。拙稿「風葉和歌集」の構造―神祇・釈教部について、『論叢』昭和六十二年一月。拙稿「風葉和歌集」の構造―賀部について、『平安文学研究』第七十九・八十合併輯。拙稿「風葉和歌集」の構造―哀傷部について、『甲南国文』平成元年三月。拙稿「風葉和歌集」の構造―春部（上・下）について、『中古文学』第四十五号。拙稿「風葉和歌集」の構造―夏・冬部について、『甲南国文』平成三年三月。拙稿「風葉和歌集」の構造―秋部（上・下）について、『論叢』平成三年一月。

〔注二〕〔注一〕参照。

〔注三〕「風葉和歌集恋部の構造」、『平安文学研究』第四十六輯。

昭和四十六年六月。

〔注四〕勅撰集の引用は、『新編国歌大観』に依る。

〔注五〕底本「つらさにあえむ」丹鶴本・嘉永元年写本本により改める。

〔注六〕「物語二百番歌合」の引用は、『新編国歌大観』に依る。

〔注七〕「風葉集」に採られている「源氏物語」歌において、その詞書に玉鬘（人稱に關する名詞表記も含めて）の名がみられるものは、この御歌以外に次の六首存する。

玉かつらの内侍のかみまかて侍けるによませ給ひける

源氏の冷泉院御歌

36 九重に霞へたては梅のはなたゝかはかりもにほひこしとや

玉かつらの尚侍ひけくろの関白のもとにわたりてのちあらめのいたうふる日つかはさせ給ける

56 かきたれてのとけきころの春雨にふる郷人をいかにしのふや

玉鬘の内侍のかみひけくろの関白のもとにうつろひてのみすみ侍けるかたにわたりたまひて山吹のさかりなるを御らんして

六条院御歌

19 思はずにゐての中みちへたつともいはてそこふる山吹の花

玉かつらの尚侍のもとにためしにもひきいてつへきねにつけてつかはしける
ほたるの兵部卿のみこ

17 けふさへやの引人もなきみかくれにおふるあやめのねのみな

れん

玉かつらの尚侍のもとにたちよりて侍けるに六条院几帳のかたひらに螢をつゝみ置給てうちかけたまへにはかにひかるをほとなくまきはしかくしければ
ほたるの兵部卿のみこ

22 なくこゑのきこえぬ虫の思ひたに人のけつには消る物かは

雪のふりける夜ころにもあらずまからす成にける女のもとにあしたにつかはしける
源氏のひけくろの右大臣

1154 心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえつるかたしきの袖

〔注八〕このうち83歌は、「物語二百番歌合」の後の七十五番の詞書中に含まれている。

〔注九〕「しのひたる処」の例としては、

いとしのひたる処におはしましたりけるにあやにくなるみ
しか夜にてあさましようなかくなりければ
六条院御歌
870 みても又あふよまれなる夢のうちにやかてまきるゝ我身ともか

な

しのひたるところにて有明の月のくまなくすみわたれるを
もろともみにてよめる
ゆくへしらぬ左大将

83 諸ともに有明の月と思は、やなと山のはにかゝるちきりそ

しのひたるところにて心ならずいて侍ける程いはんかたな

くて

我身にたとの関白

細かきりありて命たえすはいかゝせんちきらぬくれのけふの思よ
等がある。人称に関する名詞ではないが、多用されており、相
手の名・その物語場面を曖昧にする表現と考えられ、この表に
加えた。

〔注一〇〕「風葉集」の序文については、樋口芳麻呂氏「平安鎌
倉時代散逸物語の研究」(昭和五十七年二月ひたく書房)や、
『王朝物語秀歌選』(上)(一九八九年二月岩波書店)に詳しく
述べられている。

本稿は、平成三年度全国大学国語国文学会・中世文学会秋季合
同大会(於「愛媛大学」)で口頭発表したものの一部に補訂加筆
したものです。席上、貴重な御教示を賜りました諸先生方に厚
く御礼申し上げます。